日本基督教団
東中国教区ニュース
NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒710-0055
倉敷市鶴形一-五-一五
倉敷キリスト会館内
TEL(086)四二一-七八〇

イースター説教

「主の復活、ハレルヤ」

高倉栄光教会　牧師　中島献二

使徒パウロがコリントの信徒への手紙一で語っているように「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい。」のです。イースターは春に祝います（北半球のことではありますが）。秋に葉が散って枯れたように思われた桜の枝にはいつの間にか冬芽が育っています。春が来るとそれが膨らみます。蕾が更に膨らんで開花した桜は青空に映えて春の喜びを倍加させます。わたしたちがキリストの証人たり得るのは、ひとえに十字架の後三日目に復活された主が側近くにいてくださり、そのくびきを共に担ってくださるからです。

マルコによる福音書は、後代の加筆を除くと「墓が空であった」という事実だけ述べて終わっています。死んだ者を葬る墓にもう主はおられない、よみがえられたのです。墓は空だったのですから、わたしたちはもうその墓を探す必要はありません。人間を不安と失望に縛り付けていた死は主によって葬り去られ、命から命へと導かれている幸いを感謝しましょう。

主の復活を描いた箇所は福音書にいくつもありますが、印象的な一つはトマスとイエス様の再会の場面です。バルラハという彫刻家はイエス様より高齢のトマスが主に抱かれている姿を刻んでいます。主に寄り掛かるトマスは恥ずかしさと喜びと感謝を主の腕の中で味わったのです。人は自分の力で主の復活を信じることは出来ないのです。けれども聖霊に助けられ信仰によって主との再会を許された時、信じ得なかった自らを恥じつつも感謝する以外にないということをバルラハはその作品に語らせているのです。

教会は聖霊によって生み出され、生かされています。毎週の主日礼拝を小イースター、復活日礼拝を大イースターと呼んだ神学者がありますが、レントに主日が含まれていないのは正にそのためです。誰が何と言おうと、「主の復活、ハレルヤ」と主の教会は感謝を込めて共に賛美する群れです。よみがえられた主はわたしたちを友と呼んでくださいます。愛しているよと語りかけてくださいます。その全てを命の糧として受けつつ復活の主と共に福音宣教の業を励みましょう。

目次

イースター説教 …… 1
コロナ禍における教区の歩みを振り返って …… 2
二〇二二年度　第二回宣教会議報告 …… 3
「礼拝音楽の集い」報告 …… 4
二・一一集会（平和集会）報告 …… 5
按手礼のあいさつ・退任のあいさつ …… 6
「信徒と教師の合同研修会」報告・編集後記 …… 8

「コロナ禍における教区の歩みを振り返って」

東中国教区　議長　服部　修

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて三年が経過した。拡大初期には教区としてどこまでの活動が可能なのか、事実上手探りの状態がずっと続いていた。集まっての会合は延期・中止となることも多く、教区としての活動はかなり縮小した。

一方で、対面で集まることのできない状況に対してオンラインの整備が一気に進んだ。進歩の度合いはそれぞれだが、そのおかげもあって二〇二二年度にはオンラインで教区総会を開催することが可能になった。前年度、一昨年度が書面表決であったことを考えると、オンラインの画面上ではあれ教区総会の開催は教区として画期的であったと言える。もちろんそのために準備の段階から当日まで労された奉仕者の働きが多大であったことは言うまでもない。すべての議事がオンラインで可能ではなく、教団総会議員選挙は郵送としたが郵便事情の悪化の影響もありつつではあったが無事に終えることができたのは本当に大きな恵みであったと感謝している。

各委員会や各地区の働きも、対面とオンラインを使い分けながらの活動となりつつある。教区の全体予算のことから言えば、活動費における交通費支出は決して小さなものではなかったため、オンラインとの併用は有効な手段の一つではある。しかしオンラインのみでは当然のことながら限界はある。曖昧な表現で申し訳ないが、対面における空気感はオンラインでは伝わらない部分も実際ある。その意味で、この一年の教区の歩みを振り返ってみたとき、いくつかの集会で対面とオンラインの併用を試行していることはこれからの教区の可能性を感じさせられるものとなっている。オンラインを併用することによって、それが無ければ出席を断念せざるを得なかった人が参加できるようになっているからである。もちろん現地に集合して実際に交わりを持つことによって得られるものもあるには違いないが、これまでは行きたかったけれども行けなかったと諦めていた人がオンラインの併用によって参加の可能性が開かれたのは利点である。それこそ以前は鳥取・岡山でそれぞれ開催、とせざるを得なかったり、一方で開催して他方は諦めたり、といったケースがあったことを考えると、併用は教区の活動において可能性を広げたと考えることができよう。

最後に、コロナ禍にあって各教会では活動の縮小、会員数の減などで困難をきたしている教会もある。教区としては様々な形でのサポートを準備しているので、お困りのことがあれば、常置委員、財務部委員、各地区長に遠慮なく相談いただきたい。

「二〇二三年度 第二回宣教会議報告」

東中国教区　副議長　中井大介

去る二〇二三年二月二七日（月）にWeb会議にて第二回宣教会議が開催されました。このたびの宣教会議は、1）教区の課題についての意見交換、2）二〇二三年度予算案について、それぞれの話題を取り扱いました。

東中国教区を主にある宣教共同体とし、共有している課題を取り上げ、二〇二三年度における教区の宣教は、各地区や各部委員会の縦割りで完結する働きに留まらず、それらを横断する領域があってもよいのではないかという枠組みで話し合われました。二〇二〇年初頭から感染症による影響で従来の関わりとは異なる方法でつながりを模索する必要に迫られてきましたが、そのつながりを支える中心にZoomなどのオンライン会議システムが位置するようになってきました。このシステムを利用して会議や講演会、また礼拝の一部分を補うようになってきています。現実的な移動と接触が困難な中でも、話し合う技術を得ることによって、東中国教区にはある程度の方々が技術に習熟してくださったためにオンラインでの教区総会も実施できました。東中国教区の約三分の一の教会が主任担任教師を招聘できないケースを占める場合、オンライン会議システムを用いての礼拝は、同じ時刻に同じ礼拝を守ることができる技術です。それも互いに離れた場所において、ひとつの礼拝を守れるというのは、今までにない条件での宣教共同体を形成していける条件なのではないかという意見に多くの共感が集まりました。その中で、東中国教区のすべての教会がいつも主日を守れるようにするためにはどのような課題があるかが問われ、主を賛美する営みについての理解には多様性があるので、その多様な考えを持つ複数の教会が一つの礼拝を守れるような「礼拝学についての相互意識のすり合わせ」と「礼拝式順のすり合わせ」が必要だとの見解が伝道委員会によって明らかにされました。また、教会がオンライン会議システムを導入していくにあたっては、倉敷水島教会と小岩輝牧師が協力しながら信徒一人一人がオンライン会議システムにつながれるようにサポートしていったケースが分かち合われ、そうした中で丁寧に技術を習得していくためのサポートがあれば意欲を持った人々が現れるし、自分にも学べると自信を得られる方も与えられるという実績が報告されました。新しい技術についても、やってみようかな、やれたらいいなという人たちの受け皿を作っていくことは大切であり、そのためには東中国教区においてオンラインサポートチームのような部署があってもいいのではないだろうかという意見がだされました。新型コロナウィルス感染症の影響下にありながらも、つねに未来の宣教について共通の課題に取り組んでいくことこそが、結果的には将来的東中国教区宣教という議題に協働で取り組んでいくことになるのではないでしょうか。教区予算についても従来の各地区各部委員会が単独で事業を実施することに汲々とするのではなく、それぞれの地区の課題を共有し、それぞれの委員会の課題を共有し、ときにはコラボレーションしたり、合同で企画をおこなったりできるように、縦割費目であった会計について横断費目を部分的に導入して、教区会計の観点から緩やかに機構改革を進めていくという方法論もあるように示されました。宣教会議を通して、各地区長と各部委員長と常置委員とが同じ未来を見つめられるひとときを得られたことを、神に感謝します。

「礼拝音楽の集い」報告

高梁教会　齋藤永子

九月二四日（土）、第十二回礼拝音楽の集いが和気教会において開催されました。コロナ禍の中で二年ぶりの開催となりましたが、第一回から講師として関わり続けてくださっている善通寺教会オルガニストの中村証二さんが今回も講師として、午前中の講演、午後の公開個人レッスンを担ってくださいました。まだまだコロナの影響も強く感じざるを得ない中でしたが、十四教会二六名の方が参加してくださり、七名の方が公開個人レッスンを受けられました。この集い自体も二年ぶりとなりましたが、このように教区の仲間たちと共に集うことそのものがずいぶん久しぶりな感じで、当たり前のように色々な集会が教区で実施されていたのが、実は当たり前ではなかったこと、大変ではありますが、共に集う喜びというものがあることを再確認させられるような時でもありました。

「リードオルガンによる賛美歌奏」と題された講演では、中村証二さんの熱心で軽妙な語り口に引き込まれつつ、礼拝におけるオルガニストの役割について新しい気づきを与えられ、講師の情熱と喜びを分けていただいたかのような、あっという間の豊かな時間でした。

昼食をはさんで、参加者が紹介され、公開個人レッスンとなりました。申し込まれた七名の方はもちろんのこと、そこにおられるすべての人に有益な時間となるよう配慮しながら進められる感謝と感銘を受ける時間となりました。

日ごろは、それぞれの教会において同じ奉仕にあたらせていただき、時に迷い悩みながら続けている仲間たちとの出会いと学びと交わりのひと時は（担当委員だから言うのではありませんが）、大変貴重で励まされるものです。ぜひそれぞれ教会におかれましても、このような案内を目にされましたら（楽器の種類は問いませんので）、ご奉仕されている方に一声かけていただければと思います。その一声が、その方の礼拝での奉仕と、この集いをより豊かなものとしてくださることと信じてのおすすめをもって、この短い報告を閉じさせていただきます。

「ZOOM集会」（平和集会）報告

和気教会　牧師　延藤好英

二〇二三年二月十一日（土）午後二時から、カトリック岡山教会を会場に開催しました。講師は、ジャーナリストの守田敏也さん。演題は「世界の現状における非暴力の可能性」。ロシアのウクライナ侵攻から一年が経過しようとする中で、軍備拡張や敵基地攻撃の議論がされる中で、キリスト者としての立ち位置を確かにしたい、そんな思いから演題を決めました。参加者は五十二人（会場四十一人、Ｚｏｏｍ十一人）と講師でした。

講師の守田敏也さん

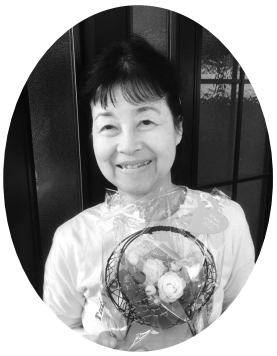
守田さんは、御自身も一九八六年のチェルノブイリ原発の爆発事故後ウクライナやベラルーシをドイツの医師団と訪問した経験などを元に、ロシアとウクライナの歴史を紐解き、双方に言い分があることを解説してくださいました。そして「戦争は情報戦であること。どちらにも巻き込まれないこと。」「政府と国民を分けて考えなければならない。」「〇〇が奪還されたという時、そこで人が死んでいることを見逃してはならない。」など語られながら、即時停戦し、その後のことは話し合いで決めていくべきだと語られました。

また、日本人は現憲法に誇りを持ち大切にするべきであると語られ、一九四七年に文部省が発行した『あたらしい憲法のはなし』の「六、戦争の放棄」から次の文章を紹介されました。「よその國と争いごとがおこったとき、けっして戦争によって、相手をまかして、じぶんのいいぶんをとおそうとしないということをきめたのです。おだやかにそうだんをして、きまりをつけようというのです。なぜならば、いくさをしかけることは、けっきょく、じぶんの國をほろぼすようなはめになるからです。また、戦争とまでゆかずとも、國の力で、相手をおどすようなことは、いっさいしないことにきめたのです。これを戦争の放棄というのです。そうしてよその國となかよくして、世界中の國が、よい友だちになってくれるようにすれば、日本の國は、さかえてゆけるのです。」

講演の後の質疑応答の中で「恐怖や不安が攻撃性を生むのではないか。そういう人にどう対応したらいいか」といった質問が出されたのに対し、「まずその人の話を聞いてください。そして共感してください。それから語りましょう」と答えられたのが印象的でした。沢山の情報を提供してくださいました。わたしたちはそこから何を汲み取り生かしていくかが問われていると思います。当日の講演はＱＲコードから守田さんのｆａｃｅｂｏｏｋに入り視聴することができます。

「按手礼式」

津山城西教会　田中直子



津山城西教会の田中直子です。

「そういうわけで、わたしが手を置いたことによって、あなたに与えられている神の賜物を、再び燃え立たせるように勧めます。」テモテⅡ一章六節

昨年十一月二七日に按手礼を受ける恵みに与りました。皆様のお祈りに感謝いたします。二〇一九年に津山城西教会に赴任して間もなくコロナ禍となり、教区内の活動をよく理解できていないところです。これからは少しずつ関わらせていただいて、教区における働きを担わせていただきたいです。

四月からは美作落合教会の主任担任教師として奉仕させていただくことになっています。これから与えられる働きを主の助けによって励みたいと願っています。良きお交わりとお祈りをよろしくお願いします。

「離任のあいさつ」

倉吉上井教会　奥田　望

振り返ってみますと二〇〇七年七月の教区ニュース誌の「新しく教区に来られた先生方の紹介」のコーナーに紹介いただいて以来のことのようですので、ずいぶん長くお世話になったことだと実感させられています。教区においても多くの出会いと奉仕を通じて様々なことを教えていただきました。たくさんの得難い経験を感謝いたします。膨大な忍耐をもって支え導いていただきましたお交わりに心より感謝いたします。

「退任のあいさつ」

琴浦教会　川上幹太

このたびは、止むを得ない事情で四年という短い任期で退任することになり、担任教会および地区、教区の皆さまに大変ご迷惑をおかけしております。ご期待に沿うことが出来ず、申し訳ありません。東中国教区そして琴浦の地を去ることには、大変名残惜しいものがありますが、皆さまからいただいた親切と信頼を忘れることなく、次の任地で励んで参ります。

四年間大変お世話になりました。ありがとうございました。

「退任のあいさつ」

倉吉教会　柴田　彰

剪定を終えたぶどうの木の前で

八年前に倉吉教会に赴任し、その五月の教区総会に初めて出席。ビックリしました。議事に入る前の激しいやり取り。もっと驚いたのが常置委員に。「えっマジ！」お陰様でたくさんの出会いと気づきがありました。

教会附属の保育園で、あるとき年長さんから質問されました。「大きくなったら何になりたい？」高齢者にも同じように将来の夢をきいてくれます。「ぶどうを育てるおじいちゃんかな」と答えました。

この春ようやく卒園。二六年保育です。牧師隠退はまだ少し先のようで大阪の教会に赴任します。空き地を借りてのぶどう栽培も本格化します。教区の皆さんに、ぶどうを食べていただけなかったのが心残りです。お付き合いくださりありがとうございました。

「離任のあいさつ」

岡山教会　涌井　徹

昨年四月に、一年の任期で岡山教会に赴任して、早くも丸一年が経とうとしています。コロナ対策のために制約も多く、行き届いた牧会活動を十分に果たすことが出来なかったことが心残りですが、あとは後任の廣田和浩先生に託すことにしてこの三月末に岡山を離れます。

岡山教会だけではく東中国教区に連なる諸教会も、ご多分に漏れず、会員の高齢化という厳しい現実に直面していることを覚えます。過度に悲観的にも楽天的にもならずに、淡々と粘り強く、宣教の業に励むほかないことを改めて思わされる一年であったように思います。

コロナのため東中国教区の皆さんとは、親しくお交わりする機会が与えられないまま失礼することになりますが、どうぞ、それぞれのお働きが豊かに祝福されますようお祈り申しあげます。

「信徒と教師の合同研修会」報告

教師部委員会　廣田崇示

二〇二三年二月二三日（木・休）午後一時から三時まで倉敷教会及びオンライン配信にて教師と信徒合同研修会が行われた。講師は小島誠志牧師（久万教会）、題は「今日の宣教と明日」であった。集会参加者はオンライン参加を含めて六〇余名であった。

講演は、マタイによる福音書やヨハネによる福音書の中から宣教（伝道）に関するメッセージをご自身の体験を交えながら説き明かされたものであった。講師は、長年の経験で養われた宣教（伝道）の深遠の一端を平易な言葉で分かりやすく話された。特に印象深かった「水をくんだ召し使い」についてレジュメより一部抜粋して引用する。

「弟子たちは水を運ぶ。ぶどう酒ではなく。水を運ぶことしかできない。人間の言葉という限界を超えられない。その言葉が神の言葉にされる奇跡。その奇跡が宣教、その奇跡なしに宣教はない。」

これは牧師と言わず多くのクリスチャンが体験してきたことではないだろうか。遠方やコロナ禍のため出席が難しい方々にも参加いただいて、会場とオンラインのハイブリッド型集会の有益性を確認することができた。

終わりに、ご参加くださった皆様、縁の下の力持ちとしてご尽力くださった倉敷教会の皆様にも心より感謝申し上げます。

編集後記

新型コロナウイルスへの警戒がまだまだ解けない中、ロシア・ウクライナ戦争は長期化し、またトルコ・シリア方面での大災害が起こりました。目を覆いたくなるような出来事が連続する中で、いのちの尊さを今一度考えさせられるとともに、人間が生きるということとは何なのかを思案してしまいます。一人のなせる業は大きな出来事の前で砂塵に過ぎないのかもしれませんが、それでも神は私たちになすべき業を託しているのだろうと思うのです。神の愛と平和を世に満たす宣教のはたらき、これが病・戦争・災害に対峙する大きな力となることを信じて、希望を抱いて根気強く進んでいきたいと願います。（W）

★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日　午前九時～午後九時

電話番号　〇九〇－一三三〇（イイミミト）－八七三〇（ハナソウ）